

## 2021年度「障害者スポーツ調査研究報告書」を発行

当財団は 2021 年度版「障害者スポーツを取り巻く環境調査結果」をまとめた報告書を発行いたします。本年度は 2021 年に開催された東京 2020 パラリンピックを含めた過去 4 大会の TV 放送量の変化やパラリンピアンへの認知度状況、また 2019 年度より実施しているトップアスリートたちのスポーツキャリアや「チャレンジ！ユニ★スポ」(障害者スポーツをユニバーサル教材として活用した体験事業)のアンケート結果より子どもたちの意識や行動の変化について掲載しています。

なお、本報告書は全国の障害者スポーツ関係機関等へ配布の他、当財団ウェブサイトでも公開します。

<https://www.ymfs.jp/project/culture/survey/017-social-environment/>



### ■報告書タイトル

#### 「障害者スポーツを取り巻く社会的環境に関する調査研究」

－ 障害者スポーツ選手キャリア、テレビ放送、選手認知度、ユニ・スポ体験の効果に着目して －

### ■報告書の概要(全5章で構成)

#### 【第1章】 障害者スポーツ選手のキャリア調査

障害者スポーツ・トップアスリートたちのスポーツを始めるに至った経緯や活動状況をヒアリング。

#### 【第2章】 テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査

東京2020パラリンピック大会前後での、障害者スポーツのテレビでの露出状況を調査。

#### 【第3章】 パラリンピアンに対する社会的認知度調査

東京2020パラリンピック大会開催後のパラリンピアンに対する社会的認知度を調査。

#### 【第4章】 シンポジウム抄録集

「パラリンピック報道とパラリンピアンへの認知度における社会発信の変化」開催レポート。

#### 【第5章】 ユニ・スポ体験での児童の意識変容調査

ボッチャ体験会を通して、子供たちの障害や障害者スポーツに対する意識変化を調査。

### 【執筆責任者コメント】 藤田紀昭 (日本福祉大学 スポーツ科学部 教授)

パラリンピックに関わるデータを蓄積してきた本プロジェクト。今年は東京2020パラリンピックの影響を調査分析。障害者がスポーツを始めるためには情報の入手とスポーツの場へのファーストアクセスが重要(第1章)。東京2020パラリンピックのテレビ報道時間は大会期間中大幅増も大会終了後はリオと比較すると激減(第2章)。パラリンピアンへの認知度は上昇(第3章)。パラリンピアン(報道される側)、元NHKレポーターなどメディア関係者(報道する側)そして研究者が熱いディスカッションを展開(第4章)。障害者スポーツ体験で子どもは変わる(第5章)などを興味あるデータを掲載しています。是非ご一読いただき、ご意見、ご批判お寄せください。

この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。(担当:大庭)

## 【参考資料】 報告書の主なトピックス

### ■第1章 『障害者スポーツ選手のキャリア調査』より抜粋

- 「義肢装具士」の存在： 下肢切断選手のほとんどが、スポーツ開始に影響を与えた人物として義肢装具士を挙げている。
- 「ロールモデル」の存在： 同様の障害や競技の選手と出会うことで、より具体的なスポーツキャリアをイメージできるようになると思われる。
- 先天性障害のある選手： 特に普通学校在学時の体育やスポーツ活動への参加に困難性がみられる。

### ■第2章 『テレビメディアによる障害者スポーツ情報発信環境調査』より抜粋

- 大会別の放送時間をみると、リオデジャネイロ大会は、北京大会から約4倍増、ロンドン大会から約3倍増と急増したが、東京大会はリオデジャネイロ大会からの大きな増加はみられなかった。
- 「開催前」「開催中」「開催後」の東京大会の放送時間をみると、「開催前」は北京大会の約6倍増、「開催中」は北京大会の約4倍増、「開催後」は北京大会の約3倍増であった。一方で、東京大会の「開催後」は、急増したリオデジャネイロ大会から3分の1に減少した。

### ■第3章 『パラリンピアンに対する社会的認知度調査』より抜粋

- 最も認知度が高い選手は「国枝慎吾」(45.2%)で、ついで、「上地結衣」(22.5%)、「富田宇宙」(11.3%)、「池崎大輔」(8.7%)、「山本篤」(7.9%)であった。
- 東京パラリンピックの観戦形態は、「テレビのニュース番組で観た」が42.9%で最も多く、ついで、「テレビで中継番組を観た」(33.0%)、「テレビの選手・競技を紹介した特集番組を観た」(11.7%)であった。

### ■第4章 『シンポジウム抄録集』より抜粋

- 2021年12月17日に開催したシンポジウム「パラリンピック報道とパラリンピアン認知度における社会発信の変化」の基調報告、パネルディスカッションの開催レポートを掲載。

### ■第5章 『チャレンジ！ユニ★スポにおける児童生徒の変化』より抜粋

- 2020年度の児童を対象とした3回（開催前、開催後、3か月後）の調査では、2019年度の調査同様に一連の学習内容が、児童の障害イメージをポジティブな方向に変容させることが示された。
- 2019年度の児童を対象とした1年後の追跡調査（4回目）では、1年後も児童の障害イメージやアダプテッドへの意識が定着することが示唆された。一方で、用具不足や予算の問題が継続に対する阻害要因となっており、日常的に実施できる環境ではないことが示された。